

<研究ノート>

## 『西遊記』の〈笑い〉に関する覚え書き

——語戯の分析の試み——

鈴木 陽 一

### 1. はじめに

『西遊記』は、明の四大奇書の中でもひとときわ〈笑い〉を大量に含んだ作品である。従って〈笑い〉そのものを分析することが、作品全体を解明する有力な方法の一つと言ってよいであろう。

だが、残念なことに文学における〈笑い〉の研究は必ずしも豊富とは言えず、とりわけ中国の白話小説に関する限りは甚だ乏しいと言わざるを得ない。しかも、『西遊記』における〈笑い〉は量的にも多く、形式・内容は多岐に渡る。そうした状況のもとでは、本稿の果すべき役割は、白話小説における〈笑い〉についての問題提起であり、今後の検討のための手がかりを造り出そうとするものである。

アメリカの喜劇、或は演芸において、〈笑い〉をもたらす表現 (=gag) を「verbal gag」と「sight gag」に分類する（小林信彦『笑学百科』，新潮社）。前者は言葉によるもの、後者は演者の姿態やしぐさなど視覚によるものを意味する。『西遊記』についても私はこの分類に従い、前者を「語戯」、後者を「所作戯」と言うことにする。

ただし、所作戯に関しては、文字化された作品である以上、次のように定義をしておく。すなわち、ある言説が指示機能によって、登場人物のしぐさ・姿態を読者に伝達し、そのメッセージが読者に〈笑い〉をもたらすものを所作戯とする。語戯と所作戯の区別が時に困難であること、また一つの言説が両者を兼ねることがありうることは言うまでもない。これは、あくまで大よその分類である。

私が本稿をきっかけに考えていこうとするのは、語戯である。なぜなら、所作戯は、作品外、言語外の **cultural context** によることが多く、**gag**

であることの確定すら容易ではないためである。

テキストは 1980 年、北京・人民文学出版社の活字本を用い、引用した原文・訳文の後の数字は該テキストの回数を示した。

## 2. 様々の語戯

語戯には、実に様々の形式がある。その代表的なものをいくつか見ておくことにしよう。

### 2.1 地 口

地口とは、同音、或は類似者に基くものである。

○祖師道。「……你姓甚麼？」猴王又道。「我無性。人若罵我，我也不惱。若打我，我也不嗔，只是陪個礼兒就罷了。一生無性。」(1, 傍点引用者，以下同じ)

ここは「姓」と「性」が同音の洒落。ここは二重の構造になっている。「名前は何と言う」と聞かれて、「名無しです」と答える。それが同時に「いくじがない」という意味に置き換えられていて、しかも悟空（ここではまだその名が与えられていないが）が「いくじがない」とは正反対の人物だから、その〈笑い〉は一層大きなものとなる。

○(三蔵) 慌得对着那盞昏灯，連忙叫。「徒弟，徒弟。」八戒醒来道。「甚麼土地土地？……」(37)

ここでは「徒弟」と「土地」が洒落になっている。夢にうなされた三蔵が、「弟子よ」と呼んだのに対して、「土地神が一体どうした？」と八戒が言うのだが、土地神は道教のそれも最下級の神であり、高僧三蔵との対比が語戯をつくっているのである。

○行者道。「你却造化，天賜汝等長寿哩。」衆僧道。「老爺呀，你少了一個字兒，是長受罪哩。」

ここでは「長寿（長生き）」と、「長受罪（長く罰を受ける）」が同音の

洒落に成っている。

## 2.2 オウム返し

○妖怪は尋ねた。「お坊さん、どちらからいらっしゃった。」八戒は言った。「どちらから参りました。」妖怪は言った。「どちらへ行かれる。」八戒は言った。「どちらへ参ります。」「お名前はなんとおっしゃる。」「私はなんとかと申します。」 (82)

ここでは、八戒は妖怪の様子を探るために、相手にさからわぬようにしている。ところがそれがいきすぎて、相手の質問を、主語を入れ換るだけで全くくり返してしまっているのである。

## 2.3 見立て

語戯の一つの有力なパターンは、あるものを全く別の、しかもかけ離れたものに何らかの類似点をもとに見立てるものである。

○こいつはまるでかまたきか、石炭堀りみたいな野郎だ。きっとここで炭焼きでもしてくらしていやがるんだ。 (17)

ここで罵られているのは黒熊の妖怪である。すなわち、色が黒いということで、「かまたき」、「石炭堀り」、「炭焼き」に見立てられているのである。そのため、本来怖ろしいはずの黒熊の妖怪も滑稽なものになってしまっている。

## 2.4 誇張・うがち

○太子ちゃん。乳歯も生えかわらず、うぶ毛もまだ乾かぬのに、よくもそんな大口がたたけるものだね。 (4)

ここで罵られているのは、哪咤太子である。哪咤太子は本来玉皇の側に仕える大羅仙であったが、妖魔退治のため地上へ仕わされた。その姿は童子として描かれ（『絵図三教源流搜神大全』）、民衆の信仰を集めた。それをここでは更に誇張して、赤子扱いしていることによって語戯たらしめて

いるのである。

## 2.5 引用・もじり

○(妖怪に捉えられた王妃を救い出すためやってきた悟空、国王の外公(=母方の祖父)と称する。これを聞いた妖怪は感ちがい。)妖怪「朝廷の中に『外』という姓のものがおるか。」王妃「私宮中にありまして、もっぱら内で主上をたすけ、朝夕女たちのしつけをしておりました。宮中のことはきりのないこと。名前などは存じません。」

妖怪「いま来たものは『外』公と名乗っているが、『百家姓』にはそんな姓はなかったと思う。……何かの本でこういう姓を見かけなかったかな。」王妃「『千字文』に『外受伝訓』という句がございます。きっとそれでございます。」 (71)

ここでは、「外」を姓と思いこんだところにまず語戲の基礎がある。そして、『千字文』という姓とは全く関係のない、しかし庶民にとっても近い書物の一句を利用してこれを無理に姓としてしまっているのである。しかもこの会話の一方は妖怪とは言え、本来観音菩薩の乗る狼、一方は王妃であるだけになおさらおかしいのである。

こうした、庶民や子供が文字を覚えるための書物の文句を無理にこじつける方法は、現在の「相声」でも gag としてしばしば用いられる<sup>21</sup>。また、魯迅の短編『孔乙己』の主人公孔乙己が『三字経』の冒頭の三文字によってつけられた名であることも想起される。おそらくこうした語戲は古くから、広く行なわれてきたのであろう。なお、『百家姓』を引用した語戲が第 87 回にも見える<sup>22</sup>。

また次の個所も広く引用を用いた「語戲」に分類できるであろう。

○(東方朔に向って) このコソ泥、こんな所にいやがったのか。帝君の所には盗んで食う桃はないぞ。 (26)

この語戲は三つの要素から成り立っている。第一は、東方朔には西王母の桃を盗んだという伝説(『漢武故事』)があること。第二は、悟空自身が桃を盗み食ったことがあること。しかも、これは『西遊記』内部にとど

まらず、『大唐三蔵取経詩話』にすでに見えるように、作品外に存在しているコンテクストであった<sup>3)</sup>。第三は、直前のコンテクストとして、西王母の桃と同様の仙果である人参果を盗み、これを倒したがため悟空は天界を飛び回っているのである。これらの三つのコンテクストが重なり合ったところに、この語戯が成立しているのである。

最後に、引用・もじりであり、かつ他の形式と複合していると思われるものを挙げておこう。

### ○你這個沙尼。(31)

これは、三蔵に破門された悟空が妖怪退治のため再び連れ戻された際、これを迎える沙悟浄に対する言葉である。

まず沙悟浄の「沙」は、彼がいた「流沙河」に因む。そして彼は弟子の中では最も僧侶らしい姿をしているので、「沙僧」、「沙和尚」と言われる。その際には、「沙」は「流沙河」の「沙」にとどまらず、「沙門」にひっかけてあり、かつ修行僧の呼称としての「沙弥」が濃厚に意識されている。

さて、そうした前提のもとに、ここでは沙悟浄のいくじのなさ、定見のなさを皮肉って、「この尼め」と言っているのである。そして先程の「沙弥」の女性形として「沙弥尼」という呼称の存在がある。つまり、「僧↔尼」と「沙弥↔沙弥尼」という二つの要素が合わさっているのである。更に「沙尼」は音としては「沙泥」に等しい。そして「沙泥」は、下らないもの、役に立たぬものとして比喩的に用いられるのである。この地口の面も合せた語戯なのである。

いくつか例を挙げて見てきたが、極めて常識的な分類によっても、その形式が多岐に渡ることはお分り頂けたことと思う。もとよりこれらの分類にあてはまらぬものも少なくないし、またいくつかの要素を合せもったものも数多い。そこで次章以後は、内容の面から考えていくことにする。

### 3. 常識への反逆

『西遊記』の中には、語戯とは言え、極めて痛烈な、時に過激な表現さ

え現れる。そうした例をいくつか見ていこう。

○私の家はこざっぱりした家ですよ。こんな黄疸病みみみたいな部屋だの、きんきらきんに塗りたい戸だのとは訳がちがうんだから。(11)

ここは、財産家ではあるが市井の人の妻であった李翠蓮の魂が、一旦死んだ後太宗の妹に移っていわば生れ変わった時のことである。皇帝にのみ許された黄色を使った、そして豪華な部屋を見た李翠蓮は驚いて、上述のようなせりふを吐いたのである。

中国における通俗的な人生の目標が「昇官発財」にあることはよく知られている。そして、「皇帝輪流做，明年到我家」の成句<sup>4)</sup>が示すように、また中国の歴史が示すように、皇帝はまさに「昇官発財」の頂点に立つ存在なのである。従って、李翠蓮が皇帝の住居を罵ることは、その「昇官発財」のモラルとも抵触せざるを得ない。

それに関連して、もう一つ付け加えておこう。そもそも李翠蓮が死んだのは、僧侶に施しをするため表へ出たのを夫にとがめられ、自殺したのである。つまり「婦道」を守らなかったための死でありながら、ハッピーエンドを迎えているのである。ゆえに私は、李翠蓮の先の言葉を「安分守己」に基くものではなく、常識への皮肉と考えるべきであると思う。

次に、悟空のせりふを紹介しよう。以下の三例はいずれも彼の言葉である。

○(妖怪に向って) 俺のお師匠を食うつもりだろう。……食うなら半分以上は孫さまによこすんだぞ。(33)

○(老人に化けた妖怪を背負いながら) 遠い道のり、この身一つだって持て余しているんだ。……こいつが妖怪でなく、かたぎの人だとしたって、この年ならもうくたばり頃。投げ殺したってかまうまい。(33)

○(みなし児に化けた妖怪を背負いながら) この険しい山道、空身だってしんどいのに、孫さまに人のかつがせやがって。この餓鬼も、妖怪でなくまっとうな人間としても、もはや親もなし、かつぐやつなどいるはずもない。いっそ投げ殺しちまおうか。(40)

最初の語戯は、悟空が弟子の中でも最も師匠思いであるだけに、そのおかしさは増す。

また、二番目の語戯は、長幼の序を重んずる中国の伝統を考えると一層強烈である。『西遊記』の中では、しばしば戦闘の場面で、自らを相手の祖父や祖先と称し、逆に相手を孫や子孫と呼ぶことがある。これは長幼の序を利用した痛烈な罵詈雑言であって、『西遊記』もこうした倫理と深く関わっているのである。それだけに、「くたばり頃だから投げ殺す」というのは、今日の我々が感ずるより更に痛烈な語戯であると考えらるべきであろう。

なお、こうした倫理に反する語戯を駆使するのは、猪八戒の重要な役割であるが、彼については拙稿『『西遊記』の人物像の再検討(二)』で述べたことがあり、ここでは引用をさける。一つだけ、重複になるが、彼の得意のセリフに、三蔵が妖怪につかまる度に、「財産分けして解散しよう」というのがあることを挙げておこう。師匠がいなければ、西天へ取经に行っても仕方がないという彼の合理的主張は、師と弟子の関係から言っても、仏教に帰依したという点からしても、その時代にあっては、無論常識にも倫理にも全く反するものであることは言うまでもないであろう。

私が本章で論じようとしているのは、『西遊記』が、常識や支配的倫理を打破するために語戯を駆使しているということではない。むしろ事態は逆であって、読者を笑わせるために語戯を用い、その結果、時として常識や倫理をつき抜けてしまったと考えるべきであろう。

無論、〈笑い〉とは何か、とか、人は如何なる時に笑うか、といった哲学上の大問題を論ずるつもりはない。現在の私は、『西遊記』の中の語戯と思われるものを、確かに語戯であるということを確認し、その数を少しずつ増やしているにすぎないのである。そして、社会通念を裏返して見せることが〈笑い〉につながることを我々は感覚として理解している。従って、『西遊記』において、倫理がくつがえされるような語戯の存在それ自体を余りに過大評価することは避けねばならないのである。

但し、それで全て問題が片づく訳ではない。今度は語戯の量が問題になる。つまり、社会通念にもとる、或は矛盾する語戯が、たとえ〈笑い〉のためとは言え多量に用いられているならば、作者の意図とは全く無関係に、作品全体をその方向へもっていってしまう可能性がある。そして『西

遊記』には、そうした可能性が十分にあると私は考える。

#### 4. 聖から俗へ

本来、聖なるもの、高貴なるものを、俗なるもの、或は卑しいものへ下落させることによって語戯とする場合が『西遊記』ではしばしば見られる。例を挙げよう。

○馬鹿ドジョウめ。(15)

○この角のあるミミズ、うろこのあるドジョウめ。(46)

この二例はいずれも悟空が龍を罵った時のものである。形式的な分類によれば、この語戯は、水中（土中）にいる細長いものという共通点をもとにした見立てによるものである。そして、両者の間には仮空と現実、巨大と微小、空を飛ぶものと、水中（土中）にのみあるもの、という大きな差がある。そして特に重要なのは、龍が聖なる動物であることである。

龍は古代社会にあっては、トーテミズムの信仰の対象となり（中野美代子『中国の妖怪』）、そして封建社会にあっては儒教のシンボルとしての地位を保ち続けた。地上の最高権力者である皇帝に対する尊称として、「龍～」という表現が用いられることから、龍の聖性が極めて重大なものであることが分るのである。更に、その聖性と共に、「逆鱗」、「龍潭虎穴」の言葉が示す如く、龍は怖ろしさをも合わせもった存在である。

龍は（仮空の動物だから当たり前だが）誰の前にでも姿を現すものではなかった。「有縁」のものでなくてはその姿を垣間見ることさえできないとされていた。『西遊記』第45回において、車遅国の皇帝が「二十三年も皇帝でありながら龍を見たことがない」のを、実物を見て感激する場面があるが、それは皇帝の徳を天が承認したことになるからである。

このような聖獣を、どこにでもいる、ちっぽけな、そして怖ろしさのかけらもないドジョウやミミズに見立てることは、天・地の権威を頭から無視することになるのである。それだけにこの語戯は極めて痛烈なものと言えるのである。

○この菩薩も全くいい加減なもんだ。俺様を解脱させて、お師匠様を

守って西天取經に行かせた。苦難の道中に行き悩んでいると、自ら危機を救いにお出ましになったことだってあるんだ。ところが今度は妖怪を使って邪魔させやがる。この分じゃ一生旦那無しでも仕方がないぜ。  
(35)

ここでは、悟空の守護神である観音菩薩が語戯の対象になっているのである。観音菩薩が女性として扱われることは珍しいことではないが、全く一般の女性と同じレベルで考えられているのである。というのも、ここでは悟空は怒って、「旦那無し」という言葉で菩薩を罵っているのである。本来、女性ではなく、かつ高位の仏であるのだから、「旦那無し」は当然のことなのだが、それを罵りの表現として用いることで逆に、悟空が菩薩を全く普通の女性とみなしていることが分る。そして、それが語戯としての役割を果させているのである。

語戯によって、聖から俗へ下落させるのは、悟空や八戒ばかりではない。時には神仏自ら語戯によって下落していくのである。その例を挙げよう。以下は、死せる国王を蘇生させるための「還魂丹」をもらいに来た悟空に対する老子のせりふの抜粋である。

○みんな気をつけろ。金丹泥棒がまた来たぞ。(39, 以下同じ)

○この猿め、五百年前天宮を騒がせ、わしの金丹をもしこたま盗み食いた。二郎真君にとっつかまって天界に送られ、わしの炉の中で四十九日焼いてやったが、炭だってどれ程費したことか。

○この猿馬鹿を言うな。何が千粒、二千粒だ。飯のかわりにでもするの。泥をこねたって、そんな数容易にこしらえられるものか。

ここには、道教の最高神の一人である老子の面影は無いに等しい。聖であるべき太上老君は、自ら語戯を連発して、俗の世界へ下落してしまっているのである。

高僧三蔵の肉を食って不老長寿を得んとする妖怪たちもまた例外ではあり得ない。彼等は様々の魔力をもった怖ろしい存在であり、かつその多くは、天界に出自をもつ聖なる存在でもある。しかし、彼等もまた、悟空や八戒の語戯の対象となり、自らも語戯を用いるのである。

○(去勢した獅子の妖怪をさわりながら) 八戒「この妖怪は下戸の赤鼻で、全くの見かけだおしだ」と笑った。(39)

○妖怪「おまえは途中で出家した坊主だな。」八戒「どうして分る。」妖怪「まぐわが使えるのだからどこかの農園に雇われていたんだらう。」(49)

○妖怪「おまえも途中で出家した坊主で、……もとは粉ひき役人だな。」沙悟浄「どうして分る。」妖怪「粉ひき役人でもなきや、そんな麵棒など使うものか」(49)

○(牛魔王の妾玉面公主，魔王に対し) 世間じゃあんたのことを男だてだと言っているけど、本当は恐妻家のいくじなしよ。(60)

○(正妻羅刹女，牛魔王に対し) 大王様，新しい女<sup>ひと</sup>を迎えられてからというもの，あたしのことは放りっぱなし。今日は一体どういう風の吹き回しでおいでになったの。(60)

○(牛魔王，悟空に対して) 俺はやつをまるごと飲みこんで，そのままクソにして犬に食わせてやりたいよ。(61)

文殊菩薩の乗用の獅子は「見かけだおし」，牛魔王は，正妻と妾の恠気に悩まされる男，ここには聖なるものも，怖ろしいものもない。言葉による〈笑い〉があるだけである。

語戯のレベルに限らず、『西遊記』においては，聖なるもの，怖ろしいものは，必ず下落させられと言ってよい。釈迦如来は手のひらに小便をひっかけられ，三清の像は便所へ放りこまれ，観音菩薩は（禅心を試すためとは言え）女に化けて八戒を誘惑する。妖怪も実はネズミであったり金魚であったり，サソリやムカデの妖怪も鶏神に出会えば手も足も出なかったりという，日常生活のレベルを離れないものも多いのである。そういう意味でも，魯迅が『中国小説史略』の中で、『西遊記』を神魔小説としたことは決して正しくない。なぜなら語戯のレベルでも，それ以外のレベルでも，神はもはや聖なるものでなく，魔も怖ろしい存在ではないからである。

## 5. まとめとして

ここまで見てきたように，語戯といっても，様々なパターンがあり，ま

た、その語戯の対象はほとんど無差別である。『西遊記』では誰もが笑われるのである。そして、その内容は時に支配的な倫理と矛盾し、聖なるものを俗世にひきずり降ろし、怖ろしいものをも〈笑い〉の中に巻きこんでしまうものであった。

ここで私が強調したいのは、これまで引用したものも含めて、語戯が闘いの場面に頻般に現れるということである。三蔵を食わんとする妖怪と、これを守ろうとする悟空らとの闘いは当然、深刻でありかつ真険であるべきものだ。その中でも語戯が用いられるということは、『西遊記』という作品全体の意味に重大な影響を与えずにはおかない。言い換えれば、本来〈笑い〉を必要としない、闘いの場面において語戯が用いられているのは、それが『西遊記』の狙いであったからではないか。

明代の白話小説は、近代小説と創作の形態も全く異なり、個々の作品のテーマを見定めることは容易ではない。『西遊記』の場合も全く例外ではなく、これをあくまで神話・伝説のレベルで解釈する研究と、解放後の中国で有力な階級闘争の（狭い意味での）反映とする研究とが並存している。もとより『西遊記』の場合、神話・伝説との関係を見捨てることは不可能であり、また、あらゆる文学作品が何らかの意味で時代の反映であることも常識である。私が問題にしているのは、そのどちらのレベルでも解決のできない、多岐に渡る豊富な語戯、それによってもたらされる無数の〈笑い〉である。従って私は、その両者の間に、そして両者をつなぐものとして〈笑い〉の軸を設定すべきであると考えている。言うならば、『西遊記』は〈笑い〉の文学作品として見なおされるべきなのである。

もし、『西遊記』が神話・伝説の集大成であるにすぎないならば、何故崇められ、畏怖されるべき神々までも語戯の対象となる必要があるだろうか。聖なるものを投げ捨てて、〈笑い〉を生み出さねばならない必然性は、神話・伝説のレベルではどこにも見出し得ないのである。そして、『西遊記』の登場人物を諸階級の代表として分類することも意味がない。『西遊記』では誰もが〈笑い〉の対象となるのである。〈笑い〉の文学作品として『西遊記』を見るべきだと主張する所以である。

『西遊記』は清刊本に至って、韻文と共に語戯の数が大きく減らされる<sup>9)</sup>。また、『西遊記』の後に、やはり言葉あそびを多量に用いた『金瓶梅』がひそかに書かれ、読まれていった。こうしたことを考えると、〈笑

い〉の文学作品として『西遊記』が創られたことは、明という時代と濃密に関わっているように思われる。しかし、早急な結論や推測を下すべきではあるまい。文中にも書いたように、語戯の確定と、そこに生ずる〈笑い〉の分析、そして、そこからおびただしい数の神話・伝説に光をあてなおし、その意味を読みとる、そうした作業の上で初めて時代との関係が明らかになってくるように思われるのである。緒についたばかりの研究に対し、諸先生の御叱正、御教示を頂ければこれにまさる幸せはない。

## 〔注〕

- 1) 最近の相声『三字経』(台湾『相声集錦』第三輯)は、その典型である。この相声は全篇『三字経』のこじつけ解釈である。
  - 2) 当該個所では、おふれの中に「上官」(高官の意味、乃至は役人への尊称として用いられる)という言葉が用いられる。ところがそれは『百家姓』にある複姓であることを、八戒が悟空に教える。
  - 3) 悟空の前身、猴行者は二万七千年前、西王母の桃を盗んだことがあるという話が、『取経詩話』第十一に見える。
  - 4) 『西遊記』にも第7回に悟空のせりふとして用いられる。
  - 5) 本稿で引用した語戯は25例、そのうち10が、清刊本『西遊真詮』では削られている。
- 補1) 本稿は1983年11月6日、都立大学における白話小説研究会での報告に基づく。御教示を頂いた諸先生に感謝する次第である。
- 補2) 本稿は、拙稿『西遊記』の人物形象の再検討(二)』(松山商大『言語文化研究』一卷一号, 1981, 6)と密接な関係にある。該論文で論じた点については、本稿で省略したものが多く、併せて読んで頂くことを希望する。

## 参考文献

- 磯部 彰. 「大唐三蔵西天取経伝説の形成」(『宋代の社会と文化』所収).  
 ————. 「西遊記における猪八戒像の形成」(『日本中国学会報』第31集).  
 ————. 「『元本西遊記』における孫行者の形成」(『集刊東洋学』38号).  
 太田辰夫・鳥居久靖共訳. 『西遊記』(平凡社, 中国古典文学大系).  
 澤田瑞穂. 『中国の民間信仰』工作舎.  
 白川 静. 『中国の古代文学』一, 二, 中央公論社.  
 中野美代子. 『孫悟空の誕生』玉川大学出版部.  
 ————. 『中国の妖怪』岩波新書.  
 福井康順(他三名)監修. 『道教』1, 2. 平河出版社.  
 『絵図三教源流搜神大全』. 聯経出版事業公司影印.  
 『西遊記研究論文集』. 北京, 作家出版社, 1957.  
 郭豫適, 簡茂森. 「『西遊記』・前言」(本稿で用いたテキスト所収).

(補論) 本稿校正の段階で、「唐僧与泥鰍」(『江南第一家——民間奇聞録』所収、1983、8、浙江文芸出版社)という物語の存在を知った。その物語によれば、泥鰍は三蔵法師のカカトの皮を食ったため、寿命は延びたが、龍王の怒りにふれ、穴にもぐって暮さねばならなくなったという。本稿で論じた、龍と泥鰍の対比を示す好例として付記しておく。